

Title	アリストテレスの三段論法の起源(1) : 論理学の形成過程をめぐって
Sub Title	On the origin of Aristotle's syllogistic (1) : the making of his logic
Author	千葉, 恵(Chiba, Kei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1984
Jtitle	哲學 No.79 (1984. 12) ,p.21- 48
JaLC DOI	
Abstract	There are four ideas about the origin .of the syllogistic. Our aim is to trace the making of Aristotle's Logic, critically examining these ideas. We assume that APr presupposes Top SE and that Top II-VII 2 comes earlier than Top I, VII 3-VIII, SE. In the latter, "συλλογισμος" (=syllogism) comes: to be used technically and theorized as dialectical syllogism. We examine first Plato's theory of division. Le Blond and others derive the ground of their idea about the origin of the Syllogistic,entirely from the sentence that the division is a weak syllogism. They interpret that Aristotle has established his syllogistic by his critical consideration of this weak syllogism. APr I 31 and APo II 5 where he criticizes Plato's division theory are different from one another in the aspect 'of argument. In APr I 31, he simply takes issue with all those who insist that the division has a power of the demonstration, and shows by trying, to syllogize the division that it cannot demonstrate anything. So he has no hesitation to say that the division is a syllogism. In APo II 5, while evaluating highly division's peculiar function, he clearly says that the division is not a syllogism. So "a weak syllogism" is mere irony. The syllogistic is not dans le prolongement of the division. But the division might be able to be arranged in the theory of the origin only in the sense of affecting the making of the dialectical syllogism in Top and SE.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000079-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アリストテレスの三段論法の起源 (1)

——論理学の形成過程をめぐって——

千 葉

恵*

On the Origin of Aristotle's Syllogistic (1)

—The Making of his Logic—

Kei Chiba

There are four ideas about the origin of the syllogistic. Our aim is to trace the making of Aristotle's Logic, critically examining these ideas. We assume that *APr* presupposes *Top* & *SE* and that *Top* II-VII 2 comes earlier than *Top* I, VII 3-VIII, *SE*. In the latter, “*συλλογισμός*” (=syllogism) comes to be used technically and theorized as dialectical syllogism. We examine first Plato's theory of division. Le Blond and others derive the ground of their idea about the origin of the Syllogistic entirely from the sentence that the division is a weak syllogism. They interpret that Aristotle has established his syllogistic by his critical consideration of this weak syllogism. *APr* I 31 and *APo* II 5 where he criticizes Plato's division theory are different from one another in the aspect of argument. In *APr* I 31, he simply takes issue with all those who insist that the division has a power of the demonstration, and shows by trying to syllogize the division that it cannot demonstrate anything. So he has no hesitation to say that the division is a syllogism. In *APo* II 5, while evaluating highly division's peculiar function, he clearly says that the division is not a syllogism. So “a

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師 (哲学専攻)

weak syllogism” is mere irony. The syllogistic is not dans le prolongement of the division. But the division might be able to be arranged in the theory of the origin only in the sense of affecting the making of the dialectical syllogism in *Top* and *SE*.

は じ め に

アリストテレスの三段論法は「論理学の全歴史における最も偉大な単独発見⁽¹⁾」であることが、また「おそらくアリストテレスの最も偉大で最もオリジナルな業績⁽²⁾」であるということが事実であるにしても、アリストテレスは三段論法がいついかなる手続きをへて、いかなる先行思想との関連において発見ないし形成されたかを明確な仕方ではどこにも述べていない。従って『分析論前書』で展開された三段論法理論の形成過程の解釈は研究者の手に委ねられ、従来その起源については様々な見解が提出されている。ギリシア語註釈者の時代から今日に到るまで、大別すれば四つの見解が提示されていると言えよう。ここで第五の新たな見解を提示することが我々の意図するところではない。根拠や原因が様々な仕方で語られるように、起源も多くの仕方で語られうる。我々は従来⁽³⁾の見解のすべてが相互排他的であるわけではなく、かえって或るものは補完的でさえあると解する。

我々は本稿において三段論法の起源探求の独自の視座を据えることによって、そこから各々の見解の持つ特徴を取り出し、対立点を判決しながらそれらの整理と秩序づけを行なう。たとえば F. C. シルラーは三段論法の起源を前五世紀におけるアテナイの民主政治の発展による公共討議、それに伴う弁論術の隆盛に求めたが⁽³⁾、それは或る限定づけによって、つまり理論的、技術的というよりは実践的、近因というよりは遠因等の限定を与えることによって、その形成過程のなかに組みこまれ秩序づけられるであろう。そしてそのような試みは我々の知る限りまだなされていない。その秩序づけによって、三段論法理論として湧きあがった論理のつきない泉に、伏水

の如く錯綜して流れ込みながら隠されていたいくつかの水源が顕わされ、論理学の起源は従来より、より説得的に解明されることになるであろう。

従来の諸見解を提示する前に、起源探求の視座を確立するために、用語における一つの困乱を除去しておかなければならない。それはアリストテレスが *συλλογισμός* と語る時、それが我々の所謂「三段論法」という訳語に対応していないことである。⁽⁴⁾ その理由は後に述べられるが、我々は *συλλογισμός* を一応「推論」と訳すことにする。解釈家たちが the syllogism, le syllogisme, die Syllogistik と語る時、概して三段論法のことを意味されているが、単に *συλλογισμός* の訳語として与えられることも多い。従って我々は彼らの意を汲みながらこの区別に即してそれらを訳しわけなければならないのであるが、推論と三段論法の区別に注意を払う時、従来の諸見解の対立や混乱は幾分やわらげられ事柄そのものに即するようになるであろう。

三段論法の起源についての従来の見解は次の四つに分類されよう。(1) プラトンの『ソピステス』『ポリティコス』において本質探求の方法として考察され、展開されている分割法 (*διαίρεσις*) に由来するとする分割法起源論。(2) プラトンの『パイドン』100 ff で試みられる原因探求の安全な次善策として展開されるイデア原因論に由来するとするイデア原因論起源論。(3) 『トピカ』と『詭弁的駁論』において討論の方法として提示されている弁証術的議論ないし弁証術的推論に由来するとする『トピカ』『駁論』起源論。(4) ピュタゴラスによって音楽理論として創始されアカデメイアにおいてその頂点に達した比例論 (*ἀναλογία*) に由来するとする数学起源論。これら四つが三段論法の起源として主に展開されてきたものである。起源にも様々な意味があり、上で注意されたように *συλλογισμός* の理解についても解釈家たちの理解が決して一様とは言えないので、これらは一概に一律に比較されうるものではないが、これらの見解を大枠でまとめあげるとするなら、三段論法理論は弁証論と数学の相互補完のもとに成立

したことが予感されるであろう。またここで両者ともがアカデメイアにおける中心的な探求課題であったことが想起されよう。

最初に、我々の起源探求の視座を確立するために、*συλλογισμός* がいかなるものとして理解されるべきかを述べ、それと三段論法との関係を論じ、三段論法が持ついくつかの特徴を提示する。さらにアリストテレスの一つの証言を手がかりに起源探求の向うべき方向を確認する。続いて、それまでに確立された我々の起源探求の視座に基づいて、四つの起源論を各々紹介し吟味検討しながら、三段論法理論の形成過程を辿る。そしてその手続きはそのまま論理学の成立状況の解明につらなるものである。

1.

συλλογισμός は『前書』の冒頭で次のように規定されている。「推論とは、そこにおいて或るものどもが〔前提として〕措定された場合に、それら措定された前提とは異なる或るものが〔結論として〕、それらがしかじかのものであるということによって、必然的に帰結する論議のことである」(An. Pr. I. 1. 24b18-20)。この規定は三段論法の定義としては、G. パツィヒ等が指摘するように「明らかに広すぎる」⁽⁵⁾ものであり、推論一般に妥当するものである。E. カップも『トピカ』と『詭弁的駁論』における *συλλογισμός* の同様な規定と比較しながら「この定義は三段論法の内的構造の明晰な概念に基づいていない……。それはむしろ推論の遂行のうちに要求されているものの説明を行っている」⁽⁶⁾と述べている。この規定において要求されているものとは論理的必然性と前提とは異なる結論ということである。我々はこの規定をあまり重要なものとはみなさない。後述のように或る人々はあまりに囚われすぎている。推理ないし推論するということは誰もが行うことであり、これら二つの要請は人間の思考の当然の要求であって、すでに三段論法理論が確立していなければこの規定がなされえない類いのものとは考えない。⁽⁷⁾つまり論理的必然性の体系的理解がなされて

いなくとも、論理的必然性を要求することはできるのである。そして実際この規定はその段階におけるものであると我々は解する (cf. *Top.* I. 1. 100 a26, *Soph. El.* 1. 165a21). この規定にアリストテレスの独自性があるのでは決してなく、これは推論の成立条件を述べたまでのことである。他方推論が三段論法となるためには、推論の条件に加えて、前提命題が二つであることと、二つの前提命題と一つの結論の各々が全称肯定、全称否定、特称肯定、特称否定という四つの量質記号のどれか一つによって結合された二つの項から成り立っており、各々が任意に何らかの様相子に支配されていることが必要である。推論と三段論法の成立条件はさしあたりこのように区別される。

ところで、E. ストリッカーが「プラトンにおける推論」において、プラトンの描く推論の枚挙的な検討を通して主張しているように、我々はプラトンの著作に *συλλογισμός* という語のみならず推論そのものをいたるところに見い出すことができる。⁽⁸⁾ プラトンにおける *συλλογισμός* とその派生語は“考える” (*Tim.* 87e, *Politic.* 280a) とか“要約する、総合的に考慮する” (*Resp.* 618d, *Gorg.* 479c) さらには“推論する” (*Resp.* 365a, *Phileb.* 41c, *Gorg.* 498e) と十分訳しうる意味を持っている。⁽⁹⁾ たとえば『ゴルギアス』498e においては「同意されたことからいかなるものが帰結するか僕と一緒に推論してみてくれ (*συλλόγισαι*)」と語られている。また『ピレボス』54c の論述において次の推論が行われている。「生成は各個各別にそれぞれ何か他の存在のために生成し、全般的には「なる」の全体は「ある」の全体のために生成する。……すると快樂は、それが生成である限り、何らかの存在のために生成するということが必然 (*ἐξ ἀνάγκης*) であろう」。ここでは推論型式第一格 Barbara が推論の必然を示す語までも伴いながら描かれていることが伺えよう。

このようにプラトンは推論を実際に遂行しながらも、なぜかこれを理論化、形式化、体系化することをしなかった。それはプラトンの対話篇の文

学的構成の制約の故にであるかもしれない。無類に豊かな彼の自由な構想力や語彙力は同一語が項として反復される形式性を好まなかったのかもしれない。M. ニールが言うように「プラトンはおそらく倫理的ないし形而上学的真理をうちたてるというもうひとつのさらなる目的なしに、それ自身のためになされる論理的探求というものを好まなかったのであろう⁽¹⁰⁾」とさえ考えられよう。いずれにせよプラトンは推論を知っているのである。ストリッカーはギリシア語古註釈者の見解を整めたうえで次のように述べている。「古代の伝統と批評は次の二点を議論の余地のないこととしている。プラトンは推論 (le syllogisme) を使用していたことと、アリストテレスがその理論を発見した⁽¹¹⁾ことである」。プラトンは推論を知ってはいたがその理論を知らなかったというのは、それは偶々彼は問答の中で結論が必然的に成立するものがあるということを知っているということだけであって、いかなる形式のもとにあれば、常に推論の必然が成立するかに関しては知っていないということである。従ってプラトンは *συλλογισμός* の理論を形成したとは決して言えないのである。

我々が *συλλογισμός* の起源を探求すると言う時、我々は『前書』において、項や量質記号また推論規則（反復規則、换位規則 etc.）さらに証明法（直証法、帰謬法 etc.）などを駆使して展開されている三つの格と各々の格の諸式からなる三段論法の起源を問うているのである。とはいえ『前書』において、アリストテレスは「すべての推論はさきに論述された諸格によって成立する。 *διὰ τῶν προειρημένων σχημάτων οἱ συλλογισμοὶ πάντες*」 (I. 28. 44b7-8, cf. 23. 41b1-3) という、つまり「すべての推論は三段論法である」という立場にあるが故に、『前書』のみをテキストにして *συλλογισμός* の起源を探ることは、結局のところは三段論法の起源を探ることになるのである。しかしながら、後述のように『トピカ』『駁論』において、アリストテレスは三段論法をその時点でまだ知らないのに、推論を推論として或る程度理論化しているのであるから、あくまで両者は区別されなければな

らない。両者を態々同一化させるこのメタ定理的な発言にこそ、彼が *συλλογισμός* と三段論法を概念的に区別していたことを明示していると見ることができよう。⁽¹²⁾ このことは現代の論理学者には到底許容されないことであると思われるが、『トピカ』をへて『前書』にいたるやアリストテレスはすべての推論を三段論法に還元することを目論んでいたのである。尚、彼は *σχήμα* (格) という語によって三段論法を意味させることがある (e. g. I. 32. 47a39-40).

以上見てきたように、推論と三段論法は概念上区別される。アリストテレスは『前書』において推論の形式化、理論化、体系化として三段論法理論を提示したのである。彼は三段論法の体系的構築をなしたが故に「形式論理学の祖」⁽¹³⁾ と呼ばれることになった。この理論は論理学の出発点と呼ばれるにふさわしい様々な特徴を有するが、それは次のようなものであろう。

一つには、彼は三段論法の格式を形式的一般的な形で提示し、正しい推論の基準を明白に把握していたことにある。すなわち彼は二つの前提命題と一つの結論命題を結びつける一定の構造連関が推論の正しさを特徴づけることを見いだしたのである。⁽¹⁴⁾ またそれと深く関わることであるが、彼は妥当な式を一般性で示すために、第一格では $AB\Gamma$ 、第二格では MNE 、第三格では $\Pi P\Sigma$ というアルファベットの字母を記号として使用し、論理的妥当性が項の意味内容にではなく形式に存することを表わしたが、⁽¹⁵⁾ これも大きな特徴と言えよう。アリストテレスが記号を単に文字や句の省略としてだけでなく、変項として使用していたことは諸家の指摘するところである。⁽¹⁶⁾ J. ルカシェヴィッツは現代命題論理の観点から『前書』で展開されるアリストテレスの論理学が形而上学的、哲学的汚染や心理主義を完全に免れた純粹に形式的で独立したシステムであることを強調し、次のように述べている。「三段論法が体系的に提示されている『前書』全体を通じて、一つの心理学的術語も存在しない。アリストテレスは直観的な確かさによって、何が論理学に属するものであるかを知っている」。⁽¹⁷⁾ アリストテレス

以前には三段論法理論に見られるような形式化は見られないのである。彼をして論理の持つ形式性を開拓せしめたものは何であったのであろうか。

2.

最初にアリストテレスのひとつの証言の考察からはじめよう。その証言の解釈が三段論法の起源探求の手掛かりを与え、我々の探求の視座を確立するように思われるからである。回顧的でも自伝的でもないアリストテレスには珍らしく、『駁論』の最終章の結尾で、彼は或る感慨をこめて次のように述べている。「それ故に弁論術がかなりの充実に達したとしても驚くにあたらない。しかし、それに対し現在のこの考究〔=弁証術⁽¹⁸⁾〕に関しては全く何も存在していなかったのである。……〔争論的議論をこととする〕弁論術が与えた教育は、手っ取り早いものであったが体系的なものではなかった(ταχεία μὲν ἄτεχνος δέ). ……弁論術に関する事柄についてはすでに古えからの論述が数多く存在していたのであるが、それに対し推論に関する(περὶ τοῦ συλλογίζεσθαι)事柄については、我々は我々以前に、語るべき何ものをも有していなかったのであって、まだ試みの域を出ない探求に長い間苦勞してきたのである」(34. 183b33-184b3)。この証言は我々の起源探求の視座を確立する上で重要である。まず推論に関する事柄が弁証術の枠組みのなかで、弁証術的な事柄として論じられていることが知られよう。そして何よりもアリストテレスはここで、推論に関する研究は今まで皆無に等しく自分こそがそれを創始し苦勞しながら形成してきたのだと誇っている。このような自負は、彼の他の文章にはほとんど見られないだけに、この発言の真実性と重要性はいっそう増してくる。また弁証術が弁論術に対比して述べられていることも注意を要するが、この問題から論じることにする。

「弁論術は弁証術に相對するものである」(*Rhet.* I. 2. 1354a1). というのも双方とも個別学を形成せず、すべての人に共通に関わる術だからである。

すなわちあらゆる人々が或る程度言論の吟味、支持、弁明、説得、反駁等を企てるからである。それらを事とする双方は一種の普遍術として類似しているのである。両者の違いはと言えば、弁論術 (*ῥητορικὴ*) は理性のみならず感情にも訴えつつ、「各々の対象について可能な説得手段を観察しうる能力」(*Rhet.* I. 2. 1355b25-26) といういわば説得術に帰するのに対し、弁証術 (*διαλεκτικὴ*) は弁論術をその一部として包摂するものであって (I. 2. 1356a30-31), 説得、吟味、反駁を事とする討論に、また知的訓練に、さらには諸個別科学の原理の探求という哲学的知識にとって有用な技術とされている (*Top.* I. 2. 101a25-b4)。

前五世紀のゴルギアスらソフィストによる弁論術の隆盛はただ争論家と懷疑論者を生みだすだけであり、「そうこうするうちに争論的な懷疑の忌むべき影響が脅威的なものになってきていた」⁽¹⁹⁾ のである。ソクラテスはそのような状況のなかで真理の探求一筋の生を送り、プラトンはソクラテスの使命を継承し、懷疑論克服の戦いのなかで、単なる説得や議論の勝利のためでない、主観に左右されることのない真の知識を手にするべく、師の問答法 (*διάλογος*) の洗練、方法化を通じて哲学的問答法 (*διαλεκτικὴ*) の形成を試みたのである。アリストテレスがアカデメイアに入門した時期には、そのひとつとして分割法が考案され盛んに論じられていたが、彼は師の影響を深く受けとめながらも独自の視点を模索していった。⁽²⁰⁾ H. マイアーは「アリストテレスは早い時期に、すでに弁論術の教本のなかに弁証術的な側面を、つまり日常の問答術、討論術の方法論をうちたてるという構想を抱いていた」⁽²¹⁾ と述べている。

アリストテレスはその方法論の形成をこの『駁論』の末尾において、弁論術との対比において誇っているのである。しかしながら、当の誇っている事柄 “*περὶ τοῦ συλλογίζεσθαι*” という一句には議論がある。P. ペルグランは J. トリコがそれを “*pour le raisonnement*” と訳していることに異議を立てて、その句の *περὶ* はアリストテレスにとっては、ある主題に

ついでに理論的研究を示す際に使われる *περί* の通常用法なので、ここでの *συλλογίζεσθαι* は術語的用法であるから “raisonner par syllogisme” を意味しており、『前書』で完成された三段論法をアリストテレスは誇っているのだと解している。⁽²²⁾ J.M. ルブロンも、アリストテレスには彼の先人たちが推論のいかなる種類の考察をも持っていなかったと言うのは憚られたに違いないので、それが三段論法理論を意味していることは明らかだとしている。⁽²³⁾

この *περί τοῦ συλλογίζεσθαι* の解釈を決定するためには、我々はアリストテレスの著作の執筆年代の推理という困難で見解のわかれる問題に足を踏み入れることを余儀なくされるが、『前書』『トピカ』『駁論』『弁論術』の執筆時期に関しては、概して H. マイアー・J. バーンズの線に従いうると思われる。⁽²⁴⁾ バーンズによるマイアーの見解の整理は次のものである。

(a) 『トピカ』全体は三段論法を全く知らない。(b) 『トピカ』I, VII. 3-5, VIII, と『駁論』は推論を知っており、*συλλογισμός* という語は頻出する。(c) 『トピカ』II-VII. 2. は推論を知らない。(d) 『弁論術』は『トピカ』と同じ状況にあり、三段論法については全く無知である。⁽²⁵⁾ (c) についてバーンズは「マイアーは『トピカ』の中心的な部分は推論の概念すら持たないと信じている」と述べている。⁽²⁶⁾ J. プランシュヴィックもマイアーは (c) における *συλλογισμός* とその派生語 (VI. 2. 139b30, 10. 148b8, 12. 149a37) は後の付加挿入であり、*συλλογισμός* という語は実質的には (c) には見られないと考えていると解している。⁽²⁷⁾ しかし我々は *συλλογισμός* という語のみならずその事態をもプラトンに見られるのであるから、(c) にその語があっても不思議なことではないと解する。ただし、アリストテレスは (c) の段階ではその語の術語的使用にまでいたっていないと解したい。マイアー自身もこれらが「術語的意味」であるかどうかは「疑わしい」という仕方⁽²⁸⁾で、(c) の段階での使用の可能性とその非術語性を認めてはいるようにも思える。

ブランシュヴィックは (b) と (c) の間に「顕著な不調和」はないとして⁽²⁹⁾いるが、実際に (c) の段階ではほとんど *συλλογισμός* という語が見られない以上、(b) と (c) の区別はやはり重要であると思える。(c) の『トピカ』II-VII. 2. は推論理論の形成をめざして論じられているのではなく、そこではアカデメイアにおける議論の方法化のための、主にプレディカビリアをめぐる様々なトpos (τόπος) をリストアップすることが意図されている。⁽⁸⁰⁾それに対して (b) 『トピカ』I, VII. 3-5, VIII, 及び『駁論』は明らかに弁証術的推論の理論化をめざしている。あるいは (c) のトpos論の諸リストを基礎資料として整理し理論化したものが (b) の弁証術的推論の理論であるということもできよう。「私が弁証術的推論や弁論術的推論と呼んでいるものは「トpos」という言葉で我々が呼んでいるものに関わりを持つものである」(*Rhet.* I. 2. 1358a10-12). 我々はアリストテレスのなかで (c) と (b) のはざままで *συλλογισμός* の術語的使用の決断がなされたと解したい。(c) から (b) への推移については『トピカ』『駁論』起源論の考察のさいに詳述する。

P. ゴールケは『トピカ』VIII巻とIX巻 (i. e. 『駁論』) は『前書』と『後書』⁽³¹⁾を前提にしていると主張している。もしその通りであるとすれば、先に我々の引用した『駁論』の結尾の節はペルグランやルブロンのように、三段論法理論を指すことになる。しかし、このゴールケの見解は受けいがたいものである。というのも、カップやニールが指摘しているように、『トピカ』と『駁論』には『前書』における推論の定式化によってだけ解きうるやっかいな論理的問題や、『前書』の前段階と思われる論理的に未成熟な議論がいくつか見られるからである。⁽³²⁾たとえば『駁論』において、アリストテレスは正しくない論議の発見ないし看破のための規則を提示することを試みているが、そこで彼は詭弁家の「付帯性に関する論過」と呼ばれる誤謬を防ぐために或る弁証術的な規則を提示している。それは、何らかの仕方で或る物が他の或る物である場合に、その時外見上の同一性の故

に両項をあらゆるケースにおいて相互に交換して使用することは必然ではないというものである (5. 166b28-30, 6. 168a34-b10, 7. 169b3-6, 24. 179a26-b6). 彼の挙示する誤謬の例を推論化するところである.

コリスコスとはソクラテスと異なる.

ソクラテスは人間である.

コリスコスは人間とは異なる (5. 166b28-36).

これは、うわべ上同一な命題の系列が正しい推論を生みだすケースに依拠し、ソクラテスと人間があらゆる場合に同一であり交換可能であるとすることによって犯す誤謬推理である. アリストテレスは本質の完全な同一性を表わす命題のケース (e. g. 人間=理性的動物) のみを正しいものとみなしている (24. 179a37, cf. *Top.* VII. 1. 152b25-29). 他のケースにおいては、推論が妥当な時とそうでない時は不定であって、或る場合にはそれが妥当であり、他の場合にはそうでないと各々その都度我々は判断するのである. 従って付帯性の論過に対しては、つまり妥当でないと思われる時には、反例を挙げて「それは必然ではない」という反論をなすべきであるとされている (24. 179a30-31). しかし『駁論』においてはこれ以上の理論的解明は与えられていない (cf. *An. Pr.* II. 20).

『トピカ』と『駁論』には三段論法の香りはない.⁽³³⁾ 格式をはじめ、大項中項小項、項連関、還元、抽出挙示等『前書』において見られる三段論法理論の特徴的な術語を見いだすことはできない. 何よりもアルファベット文字記号が両書にひとつも見られないことは重要である. このように『トピカ』『駁論』の全体が『前書』の前段階に位置していることは間違いないことである.

アリストテレスがソフィスト的詭弁的な弁論術との折衝のなかで形成を試みた弁証術において企図している事柄は、与えられたどんな主題に対しても、論敵の主張の根拠を相手から引き出しうる能力と、それと共に自分たちの主張をも一般に支持を得ている見解、前提によって基礎づけ、論敵

の攻撃を防ぐ方法を提示することであった (*Soph. El.* 34. 183a37 ff). そしてこの方法論として提示されたのが『トピカ』『駁論』における、トポス論 (*Top.* II-VII. 2) とそれに基づく弁証術的推論 (*διαλεκτικός συλλογισμός*) であった (*Top.* I, VII 3-VIII, *Soph. El.*). 『弁論術』における弁論術的推論 (*ἐνθύμημα*) もその企てのなかに包摂することができよう。「我々の企図したことは、我々に提出されたいかなる主題についても、できるだけ一般に受けいれられている前提に基づいて推論しうる何らかの能力 (*δύναμιν τινα συλλογιστικήν*) を見いだすことであった」 (*Soph. El.* 34. 183a37-38). 『前書』以前の段階においては「すべての推論について見てとることは弁証術の仕事である」 (*Rhet.* I. 1. 1355a8-9, cf. *Soph. El.* 11. 172a35-36, 34. 183a39-b1) と言われているように、推論 (*συλλογισμός*) は命題の確立と覆えしをその中心的な仕事とする弁証術を担う方法として提示され (cf. *Top.* VIII. 14. 164b2-4), アリストテレスはその形成を『駁論』の結尾で誇っていると我々は解する。アリストテレスがそれを弁論術との対比において論じ、誇っていることがその大きな証左のひとつとなるであろう。またアリストテレスのこの自負から、推論は弁証術の手法として『トピカ』『駁論』において、体系化されていない (*ἄτεχνος*) 弁論術に比して (34. 184a1), 或る程度理論化されていたことを伺い知ることができよう。また我々は先に見た推論の要請的規定も諸家の見解とは異なりこの段階のものであると解する (*Top.* I. 1. 100a25-27, *Soph. El.* 1. 165a1-2, *Rhet.* I. 2. 1356b16-18, cf. *An. Pr.* I. 1. 24b18-20⁽³⁴⁾).

以上で、我々はアリストテレスのひとつの証言を手掛かりにして三段論法の起源をいかなる方向において探求すべきであるかの指針を得、視座を据えることができた。続いて、この視座に立ちこれまでの論述を踏まえて我々は従来の三段論法の起源をめぐる四つの見解の各々を紹介吟味することを通じて、事柄そのものを開示すべく追求、考察していくことにする。

3.

はじめに最も支持者の多い分割法起源の主張を検討することにする。
『トピカ』と『駁論』の背景にアカデメイアにおける様々なテーマをめぐる議論があることは明白である。⁽³⁵⁾『トピカ』の大半はプレディカビリヤ〔定義、特有性、類、付帯性〕をめぐる弁証術的命題の確立と覆えしの手法と規則の提示が、総じて言えば討論、問答の手法と規則の提示が試みられているが、⁽³⁶⁾その主要な方法はプラトンが恋人のように大切にしている哲学的問答法 (διαλεκτική) の手法である分割法 (διάκρισις) ⁽³⁷⁾であったと考えられている。『トピカ』を見る時、分割法は聴衆ないし読者に馴染み深いあたりまえの前提として使用されており、『トピカ』の基本的な術語とそれらの相互関係の規則は分割法の理論がこの著作の基礎になっていることをよく示している。たとえば、定義に関して言えば、アリストテレスは「定義は類と種差からなる」(I. 8. 103b15-16) と述べているが、そこに彼独自の意味をもちこみながらも、分割法の術語と手続きの受容を見てとることができる。⁽³⁸⁾P.M. ヒュービーが「『トピカ』で使用されている術語の大半とそこに見い出される論理的諸仮定はすでにアカデメイアで流布しているものであり、アリストテレスの発見でないことは明らかである」⁽³⁹⁾とまで主張しているが、誇張はさしひくにしてもこのようなことはありえたことであろう。

プラトンは分割法を哲学的問答法の枠組みのなかで論じている。『パイドロス』において、哲学的問答法はものごとを、その自然本来の性格に従って、これを一つになる方向へ眺めるとともに、また「多に分かれるところまで見る能力」(266b) と捉えられている。多様に分散しているものを総観して一つの相に整める“多における一”の発見を試みる総合 (συναγωγή) と、自然本来の分節に従って種々の形態に切断する“一から多”へのプロセスである分割 (διάκρισις) によって、プラトンは定義的な知識獲得の学問体系を形成することを企てたのである。

ここで『ソピステス』219a-221cにおける「釣師」の分割の事例によって分割と総合の具体的な機能を見ることにする。釣師の固有の相を現出させ把握すべく人は分割を試みるが、分割はその端緒として、釣師を魚釣りの技術という機能的な場において総合的にとらえる直観の肉付けを前提している。探求者は対象の潜む領域をこのように設定したうえで、類似のなかに対立的差異を二分割的に見だし、⁽⁴⁰⁾ 釣師の不在の領域を切り離し、属する領域をさらに分割する。この操作の反復によってその本質が獲得されるに到るというのである。つまり分割法は定義すべき対象に適応されうる最も一般的で広い概念から出発して、二分割によって最低の種概念にまで下降する手続きである。そしてこのプラトンの分割法がアカデメイアに大きな論議をひきおこしたことは学説史家の強調するところである。⁽⁴¹⁾

マイアーやルブロン等の分割法起源論者は上述の『ソピステス』や『ポリティコス』で展開されているプラトンの分割法に潜む欠陥についての省察がアリストテレスをして『前書』の三段論法に導いたと解している。マイアーは「三段論法は分割法に対する批判的分析にその発見を負っていることは疑いえない」と述べている。⁽⁴²⁾ アリストテレスは分割法批判を『前書』I巻31章と『後書』II巻5章において試みているが、そのなかにある「なぜなら分割法はいわば弱い推論だからである」(I. 31. 46a32-33)という有名な一句に、論者は自己の見解の根拠と支柱のいわばすべてを見てとる。ルブロンは「アリストテレスは推論理論を *διαίρεσις* の延長線上に位置づけている。また彼は((弱い推論))の完全化としてそれを提示している。彼がプラトンの *διαίρεσις* について行なう批判それ自身が三段論法との結びつきを明白なものにしている」と述べている。⁽⁴³⁾ またルブロンは、これらの二章の分割法批判の中心はそれが論理的必然性を持たないことと論点先取の誤謬を犯していることにむけられているとして、分割法に対するアリストテレスのこの不満が『前書』冒頭の、我々の見解によれば推論の要請的規定であるが、ルブロンによれば「三段論法の定義」にアリストテレスを

導いたとしている。つまり三段論法が、分割法と違って、論点先取を犯すことのないために“前提とは異なる結論”を“論理的必然性”によって導出する論議であると定義されていることの「全射程」はこの分割法批判から得られたもの⁽⁴⁴⁾だとしている。

アリストテレスは分割法起源論者が主張するように、I 卷31章でなされている批判を基礎にして、三段論法という強い推論を分割法という弱い推論からの連続性において考案するにいたったのであろうか。我々は分割法が『トピカ』のトpos論形成の手続きの基礎になっていることは先述のように十分承認しうることであると考えるが、論者の主張するような三段論法との連続性ないし結びつきをそこに見てとることはできないと解する。以下において『前書』I 卷31章と『後書』II 卷5章の解釈を通して我々の見解を提示することにする。

最初にI 卷31章の『前書』における位置づけの問題を論じることにする。この章は確かに分割法起源論者ソルムゼンの言うように、機械的論理操作の連続からなる『前書』のなかでは唯一ポレミカルな箇所であり異質な感じを持たせる⁽⁴⁵⁾。31章の批判が三段論法の発見を持たらすと考える分割法起源論者にとっては、31章は「前後二章とのゆるい関連」⁽⁴⁶⁾しかなく元来独立した一節であり『前書』のこの箇所に後に付加挿入されたと解されることになる⁽⁴⁷⁾。しかし我々はそう解する必要を感じない。なぜ分割法批判が31章に置かれているかということは、I 卷27章から30章まで推論の前提選出の問題が論じられているが、その章の結びの句に注目する時、理解されるであろう。「一般的にいかなる方法によって諸前提を選出しなければならないかはほぼ論述されたが、正確には弁証術についての著作のなかで (ἐν τῇ πραγματείᾳ τῇ περὶ τὴν διαλεκτικὴν) 我々は詳述しておえている」(46a28-30)。ここで『トピカ』が言及されていることから解するように、この数章で推論の前提の確立の方法を論じるさいに、その間常に『トピカ』の基本的手続きである分割法がアリストテレスの念頭にあったので、続く31章でそれ

が取りあげられたのだと思われる。

またアリストテレスは、分割法批判をなしおえた31章末尾で、論証 (*ἀποδείξις*)⁽⁴⁸⁾ がいかなる方式で成立するかをこれで論じおえたとしているが、三段論法理論による論証の成立方式を展開した一連の論述の最後の31章で、『前書』の立場から、分割法が論証力を持っていると主張するすべての人々に対して、それが論証力を持たないことを、分割法を推論化してみせた上で提示したのであると思われる。

従って31章は、双方とも論証力を主張しているが故に競合している分割法と三段論法理論が各々の仕方で成熟した方法論としてつきあわされた箇所である。そこでアリストテレスは、自己の独自の立場から、プラトンのみならず分割法を使用するすべての人々が⁽⁴⁹⁾ (46a35) 論証可能なものと不可能なものの区別を知らなかったということ、さらに可論証なものを論証する固有な方法について無知であったということを批判している (46a34-b3) と解しうるであろう。⁽⁵⁰⁾ P.ショーリーも「三段論法理論によるプラトンの分割法に対する執拗で幾分不公平で不愉快な吟味は、アリストテレスがそれによって彼独自の発見の道を感じとった手続きの記録というよりは、むしろ二つの完成した競合する方法の論争的対比と理解されうる」と述べてい⁽⁵¹⁾る。

31章のテキストそれ自身が我々の解釈を補強する釈義を十分に許すであろう。この章の冒頭の一筋は重要である。「ところで (*δε*) あの類どもによる分割法が上で論述された方法のほんの小部分であることは、容易に見て取ることができる」(46a31-32)。この「上で論述された方法」とはI巻1章から26章にいたる序説をも含む推論の格式の構造と27章から30章にいたる推論作成の論述全体がめざしている「論証」(I. 1. 24a10)の方法を指している。ところで続く「ほんの小部分 (*μικρόν τι μέρος*)」という表現は微妙なニュアンスを含んでいるように思われる。つまりこの表現は分割法の論証力に関して肯定的なものなのかそれとも否定的なものなのかというこ

とである。アリストテレス自身は「……ほんの小部分であることは、容易に見てとることができる」と暢気に構えているが、それは皮肉なことだと言わねばならない。分割法は27章から30章にかけて、推論の前提選出の方法として有効に機能することが述べられており、その意味において間接的には推論にひいては論証に貢献していることは否定できないことである。しかし、30章は「ところで (ὅθεν)」で始まり、これまでの前提選出に関わる議論から離れ、そこでは分割法の論証力をめぐる正面からの批判が行なわれようとしているのである。上で見たように、アリストテレスは続く論述全体で、分割法はそのものとしては論証力を持っていないことを批判している。このように全体として見る時、分割法は前提選出に役立つにしても論証のほんの小部分にすぎないと否定的アイロニカルに理解されるべきであると思われる。つまりこの冒頭の一文はこの章の趣旨全体を予め見通した形で述べられていると解すべきだと思われる。

この冒頭の一文には、「なぜなら分割法はいわば弱い推論だからである」(46a32-33) とその理由句が続けられている。この文章も「弱い推論」という表現の持つ曖昧さからくる微妙さを持っている。しかしこの一文に対しさらなる理由句 (γάρ) で続けられる文章は「弱い推論」の実質内容を説明するために導入されているが、その論旨は明確であり、そこでは弱い推論である分割法は論証力を持たないということの理由が述べられている。このようなものであるとする時、二つの γάρ で結ばれる三つの文からなる一連の論述を、今度はこの最後の理由である分割法の論証力のなさという事実から遡ってみるとするなら「弱い推論」という表現も、従って「ほんの小部分」という表現も論証力に関して否定的な意味を持つものとして理解されるべきことは明らかであろう。

「弱い推論」であることの実質内容とは、分割法によっては証明されるべきものを論理の必然として結論づけることができずに、予め結論を要求し容認するという論点先取の誤謬を犯しているということと、常に証明さ

れるべきものより上位概念の或る何ものかしか推論しえないということである(46a33-34, 46b10-11). たとえば「すべての動物は可死か不死である」そして「人間は動物である」が前提に容認されたとしても, 「人間は可死的動物である」は論理の必然として結論づけられ得ない. 得られるのは「人間は可死か不死である」という選言命題であって結論づけたい先の事柄より上位概念のものでしかない. 他方この「人間は可死的動物である」を結論づけるとするならば, それは予めこれを隠された前提として要求先取していることを示している(46b3-11). アリストテレスは「最初の論点を要求し容認することは……提出されていることを論証していない(*μὴ ἀποδεικνύουσι*) ことに入る」(*An. Pr.* II. 16. 64b28-29) と明確に述べている.

我々のここでの問題は, アリストテレスが分割法をたとえこのように欠陥のある弱いものであるにしても「推論」であることには違わないと理解しているのかということである. もしそうであるとすれば, 分割法起源論者の連続性の主張は或る説得性を帯びることにもなろう.⁽⁵²⁾ ペルグランは『後書』II巻5章の論述に依拠して, 分割法が推論でないことを力説している. 彼は先の “*ἔστι γὰρ ἡ διαίρεσις οὐκ ἀσθενὴς συλλογισμός*” の一節を, *οὐκ* を強く読むことによって「分割法はあたかも弱い推論のごときものだからである」と訳している.⁽⁵³⁾ というのもアリストテレスは『後書』II巻5章で「分割法は推論ではない」(91b32-33) とし, また「分割法が我々に何ごとかを知らしめるとすれば, それは推論とは別の仕方によるものである」(91b33-34) と明白に語っているからだとしている.⁽⁵⁴⁾ これは分割法に対するアリストテレスの態度の決定的な表明であると言えよう.

我々はペルグランのように訳す必要を感じないが, 結論的には彼と同様分割法は推論ではないと考える. 先述のようにアリストテレスは *συλλογισμός* とその派生語を多義的に使用している. 何よりも我々は『前書』I巻31章と『後書』II巻5章の分割法批判の問題の布置が異なっているが故に, 両章に齟齬があるように見えていと解する. 31章では分割法に関して

ἀσθενὴς συλλογισμός の他, συλλογίζεται (46a34), συλλογίσασθαι (46a37), συλλογισμός (46b9) 等の語が使われており, 31 章では分割法が推論であることを認められているかの如き観を呈している. しかしながら, アリストテレスは31章において分割法が推論であるのかそうでないのかについては無頓着であり, συλλογισμός の語使用になんの躊躇いを感じていない. アリストテレスの推論理論の立場から分割法を推論化してみると, その持つ欠陥が明白になるということを主張しているだけである. 彼の分割法が「弱い推論」であるという発言はアイロニー以外の何ものでもない. 彼にとってここでの問題は分割法がアリストテレスの推論理論に抗して論証力を主張していることである. 31章が編み込まれている文脈は論証の成立方式の展開ということであって, 先に見たように分割法には論証力がなく, それまでに展開された推論理論だけが論証を持たらずと論じることが眼目なのである.

従って, 分割法起源論者が主張する如く, この章には分割法という弱い推論からアリストテレスの強い推論が批判的に構築されたという類いの主張は見いだされえないのである. この章に推論理論としての三段論法の直接的な起源を求めることには無理がある. もし三段論法が分割法から考案されたということをアリストテレスが自覚していたとすれば, 分割法が推論でない以上, συλλογισμός の語用にもう少し注意深かったであろうし, 分割法を推論化して議論を展開することはなかったであろう. また分割法は我々が『駁論』最終章のアリストテレスのひとつの証言からすでに得ている弁証術の理論化の方向に起源を探るべきであるという視点からは遠いところに位置していることをも述べておかなければならない.

ペルグランはこの章の背景には師プラトンの分割法とその弟子アリストテレスの推論理論を調停しようとするアカデメイア内における「方法論的シンクレティズム」があり, それをアリストテレスが提示し批判していると推理しているが, それは十分考えられることである.⁽⁵⁵⁾ その調停とは「A

は B か Γ である」, 「 Δ は A である」という両前提は分割法が提示するものであり, 「 Δ は B か Γ である」と論理的必然性によって結論づけるのは推論の仕事であるというものである。アリストテレスは, 先述のように, この分割法的推論によっては選言命題が結論されるだけであり, 「 Δ は AB である」ないし「 Δ は A Γ である」ことは論理の必然としては導出されず, その結論は隠された前提として論点先取されている, と批判していると解することができる。この31章がペルグランの言うとおりに師と弟子の調停者によるシンクレティズムに対する批判ということであるにしても, その調停者たちは分割法使用者のうちに数えられている。「まさにこの点〔上位概念の推論と論点先取〕に分割法を使用するすべての人々は気づいていなかった」(46a34-35)と批判されている。この「すべての人々」という表現から理解されるように, この章ではプラトン一人が批判の対象でないということも, 我々の論点にとっては重要であり, いっそう二つの競合する理論の対決の様相を呈していると言えよう。また学園内における方法論的シンクレティズムの状況を想定する時, 分割法が推論として処理されていることが, よりいっそう納得のゆくことになる。

とはいうものの、『後書』II巻5章ではっきり述べられているように, 分割法は本来的に推論ではないのである。この章は先の31章の繰り返しとも見られているが, 両章は論述の局面を異にしている。ここでは分割法の持つ欠陥の確認もなされているが, 分割法にひとつのふさわしい場所を与える試みが見られる。分割法の手続きに対する彼自身の見解が提示され (91b28-32), ちょうど帰納する者が, 推論のように論証しはしないが, 何とかを明らかにする (*δηλοῖ τι*) ように, 分割する者も推論とは異なった仕方によって何とかを知らしめる (*γνωρίζειν ποιεῖ*) と, 分割法は積極的, 肯定的にとらえなおされている (91b32-35)。分割法は推論理論と争い, 推論の機能を担おうとする時には無力であるが, 推論の無力なところでは自己の使命を果すのである。その使命とは定義の確立と推論の前提命題の把握

である。

以上のように、『前書』I 卷31章におけるアリストテレスの分割法批判はプラトン一人のそれに対するものでなく、学園内の分割法使用者の調停理論に対する、或いはアリストテレス自身による分割法の推論化によって浮き彫りにされる分割法の論証をめぐる欠点に対するものである。それに対して『後書』II 卷5章のそれは分割法の持つ推論とは異なる独自の機能に対する評価に導くものであって、両章の論点は異なっているのである。従ってI 卷31章で推論ではない分割法が一種の推論のように論じられたとしても奇異なことではないし、両章に齟齬があるわけでもない。以上のすべてのことから、分割法起源論者が『前書』I 卷31章に自己の見解を依拠させるのはコンテキストの無視、誤解であると言わざるをえないであろう。

なお分割法起源論者ルブロン⁽⁵⁶⁾のさらなる誤りは『前書』冒頭の論理的必然性と前提とは異なる結論という推論に対する要請的規定を「三段論法の定義」と捉え、三段論法と分割法の連続性を、たとえ否定媒介的にであれ、主張したことである。我々が解したように、『前書』冒頭の推論の規定は要請的なものであり、まだ三段論法の理論の展開なしにもなされうる程度のものであると、そのように把握したうえで、分割法から推論の理論化に通じると論じるのであればまだしも、いきなり三段論法に分割法を関係づけることは無理である。三段論法にいたるにはまだ長い道のりを要するのである。

また推論の規定において「前提とは異なる或るもの *ἕτερον τι*」とアリストテレスが語る時、ルブロンはそこに分割法の持つ欠陥の反省から得られたものとして論点先取の回避を読みとるが⁽⁵⁷⁾、勿論結果的にそのことは含まれているとしても、アリストテレスがこの規定において意図していることと論点先取ということで彼が理解していることはそのまま重ならないように思える。『前書』II 卷16章の論述から明らかなように、論点先取とはそれ自身によって自明でないものをそれ自身によって証明しようとする時に生

じる誤謬であるが (64b36-38), それは「提出されていることを論証していない $\mu\eta\ \alpha\pi\omicron\delta\epsilon\iota\kappa\nu\acute{o}\nu\alpha\iota$ 」 (64b28-30) 事態として論じられる誤謬なのであって, 推論としては成立しているのである (64b30-34)⁽⁵⁸⁾. 勿論前提 $p \cdot q$ から p や q をいきなり結論したとすれば, 論証になっていないだけでなく, 推論の規定にも反することになる (cf. 64a38-39). しかしアリストテレスが実際に論点先取の誤謬を論じる時考慮しているケースはより複雑なものである. 16章では命題 A が B によって, B が Γ によって, さらに隠されていて直ちには解らないが実際には Γ が A によって証明されているような場合が考察されている. というのもそこでは結論が前提のひとつと同程度に不明瞭 ($\tau\acute{o}\ \acute{o}\mu\omicron\iota\omega\varsigma\ \acute{\alpha}\delta\eta\lambda\omicron\nu$) であるので, 項と項との同一性を見破ることができないからである (64b40-65a4, 65a10-65a19). 従って「前提とは異なる或るもの」とアリストテレスが語る時, 彼が念頭においていることはブランシュヴィックが指摘しているように, $p \rightarrow p$, $q \rightarrow q$, $p \cdot q \rightarrow p$, $p \cdot q \rightarrow q$ 等の結論において諸前提の繰り返しがあってはならないというだけのことであり⁽⁵⁹⁾ と思われる.

我々は分割法起源論についてこれまでの考察を通して次のように結論づけることができるであろう. 分割法は推論ではなく, 論者が主張するほどの三段論法との連続性を見てとることはできない. しかし分割法は、『前書』の前段階にあり弁証術的推論として或る程度推論の理論化を企てている『トピカ』と『駁論』の基礎的な方法論を構成しているという意味において, またその程度においてだけ, 三段論法の形成過程に組み込まれ秩序づけられうるということである. [未完]

註

引用著作の表記は慣例に従って略記する (e. g. *Analytica Priora* → *An. Pr.*). 尚本文中における日本語による著作の表記も『分析論前書』は『前書』に『分析論後書』は『後書』に『詭弁的駁論』は『駁論』にすることがある.

(1) D. Ross, 'The Discovery of the Syllogism,' *The Philosophical Review*

- 40, 1939, p. 251.
- (2) H. Tredennick, *Aristotele I: Prior Analytics*, Loeb, London, 1938 (1973), p. 182.
- (3) F. C. S. Schiller, *Formal Logic*, London, 1912 (1977), p. 189.
- (4) 訳語を区別しない F. ソルムゼンもこの状況に気づいている。「アリストテレスは……“syllogism” という語を syllogism の一般理論を形成する前に、また syllogism を決定的なものにする前に使用している」。F. Solmsen, ‘The Discovery of the Syllogism,’ *The Philosophical Review* 50, 1941, p. 411.
- (5) G. Patzig, *Aristotle's Theory of the Syllogism*, tr. J. Barnes, Dordrecht, 1963 (1968), p. 45.
- (6) E. Kapp, ‘Syllogistic’ *Articles on Aristotle, 1. Science*, tr. M. & P. Dill, Duckworth, 1931 (1975), p. 41.
- (7) アリストテレスは *συλλογισμός* とその派生語をかなり自由に多義的に使用している。たとえば「残りの争論的推論は推論であって推論でない。ὁ δὲ λοιπὸς ἐριστικὸς μὲν συλλογισμός, συλλογισμὸς δ'οὔ」(*Top.* I. 1. 101a2-4) とか「弱い推論」(*An. Pr.* I. 31. 46a33) という表現も見られる。
- (8) E. de Strycker, ‘Le syllogisme chez Platon,’ *Revue Néoscholastique de Philosophie* 34, 1932, p. 42-56, p. 218-239.
- (9) cf. D. Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, Oxford, 1949, p. 291, W. A. de Pater, *Les Topiques d'Aristote et la Dialectique Platonicienne*, Friburg, 1965, p. 54-55.
- (10) W. & M. Kneal, *The Development of Logic*, Oxford, 1962 (1978), p. 14.
- (11) E. de Strycker, ‘art. cit.’ p. 56.
- (12) cf. J. Barnes, ‘Proof and the Syllogism,’ *Aristotle on Science; The «Posterior Analytics»*. Padova, 1981, p. 25.
- (13) D. Ross, *op. cit.*, p. 29.
- (14) 大出晃『論理の探求』慶応通信, 1980, p. 46.
- (15) cf. G. Granger, ‘Le Syllogisme catégorique d'Aristote,’ *L'Age de la science*, 3, no. 4, 1970, p. 283.
- (16) M. ミニユッチによれば字母の項の省略としての例は *An. Po.* I. 13. 78a31. s. q., 命題変項としての例は *An. Pr.* I. 15. 34a5. s. q., 項変項としての例は *An. Pr.* I. 2. 25a14. s. q. に見られる。M. Mignucci ‘Sur la ((methode)) d'Aristote en logique’ *Revue International de Philosophie, La methodo-*

- logie d'Aristote*, Paris, 1980, p. 360, n. 2, cf. I. M. F. Bochenski, *Ancient Formal Logic*, Amsterdam, 1968, p. 22.
- (17) Łukasiewicz, *Aristotle's Syllogistic*, Oxford, 1957, p. 13. cf. G. Patzig, *op. cit.*, p. 194-195.
- (18) cf. H. Maier, *Die Syllogistik des Aristoteles II. 2*, New York, 1900 (1970), S. 61, Anm. 2.
- (19) H. Maier, *op. cit.*, S. 57.
- (20) cf. G. Ryle, 'Dialectic in the Academy,' *Aristotle on Dialectic, The Topics*, Oxford, 1968, p. 69.
- (21) H. Maier, S. 60-61.
- (22) P. Pellegrin, 'Division et syllogisme chez Aristote,' *Revue Philosophique*, no. 2, 1981, p. 171.
- (23) J. M. Le Blond, *Logique et méthode chez Aristote*, Paris, 1939 (1973), p. 60, n. 3.
- (24) H. Maier, *op. cit.*, S. 79-82. J. Barnes, 'art. cit.', p. 43-44, n. 43, p. 51-52, n. 55.
- (25) cf. S. Raphael, 'Rhetoric, Dialectic and Syllogistic Argument: Aristotle's Position in *Rhetoric* I-II,' *Phronesis* 19, 1974.
- (26) J. Barnes, 'art. cit.', p. 44, n. 43.
- (27) J. Brunschwig, *Aristote: Topiques (livres I-IV)*, Paris, 1967, Introduction p. 74.
- (28) H. Maier, *op. cit.*, S. 81, Anm. 3.
- (29) J. Brunschwig, *op. cit.*, p. 75.
- (30) トポスとプレディカビリヤについては後に詳述される。5. 参照。
- (31) P. Gohlke, *Die Entstehung der Aristotelischen Logik*, Berlin, 1936, S. 20.
- (32) cf. E. Kapp, 'art. cit.', p. 43-44. M. Kneal, *op. cit.*, p. 37-38.
- (33) cf. J. Barnes, 'art. cit.', p. 47. また T. ヴァイツも『トピカ』Ⅷ巻2章 157b36 以下の帰謬法による論証に関する議論が『後書』Ⅰ巻26章の論述と異なっているところから、次のように述べている。「そこからアリストテレスが『トピカ』を書いた時には、まだ十分に論証と三段論法 (syllogismus) の真の本性を見究めていなかったということがおそらく導びき出されうるであろう」T. Waitz, *Aristoteles, Organon 2*, Leipzig, 1846 (1965), p. 514.
- (34) cf. J. Brunschwig, *op. cit.*, p. 75, p. 31, n. 1.
- (35) cf. I. Düring, 'Aristotle's Use of Examples in the *Topics*,' *Aristotle*

on Dialectic, The Topics, Oxford, 1968, p. 202. R. ボスレイはアカデメイアの具体的な状況として次のようなものを想定している。「今日は君の番だが、“快楽が善でない”ことを示してくれ給へ。或るいはもし誰かが“快楽は善である”と主張するなら、彼を自己矛盾に陥いらせてくれ給へ」。R. Boselay, *Aspects of Aristotle's Logic*, Netherland, 1975, p. 49.

- (36) cf. J. Brunschwig, *op. cit.*, p. 45.
 - (37) cf. Platon, *Phaedrus*. 266b. H. Maier, *op. cit.*, S. 62.
 - (38) cf. J. M. Le Blond, 'Aristotle on Definition,' tr. J. Barnes, *Articles on Aristotle, 3. Metaphysics*, London, 1939 (1979), p. 67. P. Aubanque, *le problème de l'être chez aristote*, Paris, 1963 (1972), p. 182.
 - (39) P. M. Huby, 'The Date of Aristotle's *Topics* and its Treatment of the Theory of Ideas,' *Classical Quarterly* 12, 1962, p. 76.
 - (40) 『ソピステス』『ポリティコス』においては二分割が行なわれているが、『ピレボス』16c-17a では多元的分割の可能性が論じられている。cf. W. A. de Pater, *op. cit.*, p. 50.
 - (41) H. チャーニスによれば、スペウシッポスは分割法に独自の意味をもちこんでいる。彼はイデア論を個々のイデアの独立自存性の故に分割法に矛盾するとして否定し、本質を差異関係のネットワークにより規定する差異の存在論をうちたて、「アリストテレスの思想に重大な影響を及ぼした」と考えられている (H. Cherniss, *The Riddle of the Early Academy*, New York, 1945 (1980), p. 43.). スペウシッポスは、或る事物を規定するためには、それとは異なるあらゆる事物との関連においてその事物の特殊な差異性をまず知っておかねばならないとしている。或る対象の本性はまさに他のすべての実在とのその諸関係の複合体であるとされている。従ってスペウシッポスにとって実在の内容は普遍的な分割図式のなかに区画された諸関係それ自身の全ネットワークに他ならない。
- このようなスペウシッポスの独自の分割法解釈のアリストテレスへの影響ないしアリストテレス自身のプラトン批判への利用を、たとえば『トピカ』VI. 6. 143b11-32 に見ることができる。他方、アリストテレスは『後書』II. 13. 97a6-22 においてスペウシッポスの分割法理解を根本的に批判している。
- (42) H. Maier, *op. cit.*, S. 59.
 - (43) J. M. Le Blond, *Logique et méthode chez Aristote*, Paris, 1939 (1973), p. 61-62.
 - (44) J. M. Le Blond, *op. cit.*, p. 65.

- (45) F. Solmsen, *Die Entwicklung der Aristotelischen Logik und Rhetorik*, Berlin, 1929 (1975), S. 181, Anm. 2.
- (46) H. Maier, *op. cit.*, S. 77, Anm. 2.
- (47) cf. H. Cherniss, *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy*, New York, 1944 (1972), p. 31, n. 24. D. Ross, *op. cit.*, p. 397-398.
- (48) 論証 (*ἀποδείξεις*) はそれ自身としては真で第一の諸前提からの推論として規定されているが (*An. Po.* I. 2. 71b16-25, cf. *An. Pr.* II. 16. 64b32-33), 不完全推論の妥当性を示すために使用されるすべての方法も *ἀποδείξεις* と呼ばれている (e. g. 换位 : I. 6. 28a28, 帰謬法 : I. 5. 27b3, 16. 28a23, I. 8. 30a9, 抽出挙示 : I. 6. 28a23). その理由については G. Patzig, *op. cit.*, p. 185-186, n. 12. を参照.
- (49) アレクサンドロスは 46a35 の πάντας を「プラトン主義者 (*οἱ περὶ πλάτωνα*)」と解している. Alexander Aphrodisiensis, *In Aristotelis Analyticorum Priorum Librum I Commentarium*, ed. M. Wallies, Berlin, 1883, p. 333.
- (50) cf. H. Cherniss, *op. cit.*, p. 28.
- (51) P. Shorey, 'The Origin of the Syllogism,' *Classical Philology* 19, 1924, p. 6, Repr. in, P. Shorey, *Selected Papers*, vol. II. New York & London, 1980, p. 313.
- (52) パテールはプラトンの使用する συλλογίζεσθαι の意味と分割法の機能との親近性を強調して「それ故に 分割法をひとつの συλλογίζεσθαι と呼ぶことは正当なことであるように思われる」と主張している. W. A. de Pater, *op. cit.*, p. 54.
- (53) P. Pellegrin, 'art. cit.', p. 175.
- (54) P. Pellegrin, 'art. cit.', p. 176 f.
- (55) P. Pellegrin, 'art. cit.', p. 175.
- (56) J. M. Le Blond, *op. cit.*, p. 61-62, 65.
- (57) J. M. Le Blond, *op. cit.*, p. 65.
- (58) 推論としては成立しているが論証していないケースとしては、他に偽の前提から真なる結論を導く推論を 挙げる ことができよう. 「偽なる前提から真なる結論が推論されうる. ただしそれは事実を示すだけであって根拠を示しているわけではない」(II. 2. 53b8-9). この一節について G. グランジェーは次のように述べている. 「この場合、三段論法は 推論としては正しい. しかしそれは論証してはいない. なぜならその諸前提は単に必然なものでないだけでなく、実際真なるものでもないからである」G. Granger, *la théorie*

アリストテレスの三段論法の起源 (1)

aristotelicienne de la science, Paris, 1976, p. 112. また『前書』Ⅱ巻5-7章の循環論証においても同様であり, それは推論としては成立している (cf. *An. Po.* I. 3.).

(59) J. Brunschwig, *op. cit.*, p. 32, n. 1.